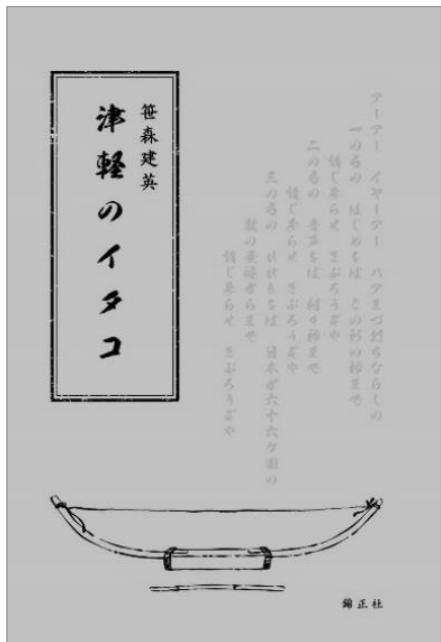


【書評・紹介】

笹森建英『津軽のイタコ』

(錦正社、2021年、A5版、200ページ、2,800円+税)

甲地 利恵



本書は、著者である笹森建英氏が1979年から始められた、津軽地方のイタコの巫業や習俗についての調査報告（文化庁文化財保護部編 1986）に基づき、一般の読者向けに著されたものである。まずはその目次を紹介しよう。

序

第一章 口寄せ

はじめに／死に口（死んだ人の霊との交流）／生き口（生きている人の霊との交流）／ハナコ（死んだ子供の霊との交流）

第二章 名称

はじめに／語源／菅江真澄のイタコに対する記述

第三章 歴史

はじめに／中世・近世のイタコ／明治期のイタコ・禁制／鑑札／職業に対する偏見

第四章 巫業

はじめに／霊能者としての特質／巫業内容／巫具

第五章 イタコの生活史

はじめに／生活史／仕事

第六章 加持祈祷

はじめに／人間経／男の人の体の熱が冷める経／法語（ほごと）／キツネ憑き

第七章 祝福・祈祷祓いの経文

はじめに

第八章 祭文

はじめに／オシラ祭文 オシラ経／岩木山一代記／金比羅一代記

第九章 音・音楽

はじめに／音具／歌唱

第十章 宗教・信仰

はじめに／恐山現象／習俗としての巫業／ゴミソ、ヨリ祈祷

結語

補遺—口寄せの経文—（笠井キヨ巫女による）

引用・参考文献

あとがき

著者は「序」で、本書執筆の契機について述べている。近年のイタコに関する出版物や報道などに「不確かな情報や事実と異なる記述が多い」(3頁)ことや「津軽に特化した著書で信頼できるものが少ない」(同前)こと、先行する研究や報告書の多くにおいて「依頼者を分析検討する観点の欠落し、依頼者からのイタコへの視点も無視されている」(4頁)こと、また、祈祷祓いもイタコの巫業の一部であるがこれまで報告されることが少なかったこと(5頁)などが、執筆の動機であったという。

このうち「イタコが何をするか」だけではなく、「依頼者たちが何をイタコに求めているのだろうか」(182頁)に視点を転じてみることは、イタコの習俗が今日までひっそりと、かつ脈々と伝えられてきた歴史(第三章)を理解する鍵の一つとなる。男性が支配してきた大宗教のように表立つこともなく、津軽の地域社会の女性を中心として支持されてきたのは、「口寄せ」の儀礼を通じてイタコから得る言葉、とりわけ死者の霊と対話することが、何としても生きていくための心の支えとして必要だったのだろう。

死者の霊を下ろす際の経文では、極楽の前にまず地獄を巡る内容が描写される。現代においてもなお女性の経血や出産を「穢れ」とみなす残滓は少なくないが、イタコの伝える経文では当時の封建的秩序や『血盆経』を思わせる、不条理にも女性ゆえに堕ちるとされる地獄描写が繰り返される(17-18頁、158-161頁)。ただし「イタコ自身が女性であり、依頼者の多くが女性であったため女性特有な悩みが問題にされる」(17頁)巫業にあって、笠井キヨ巫女が伝えるホトケおろしの経文に「後世(ごせ、ごぜん)の舟」(18-21頁)という救いが最後に示されていることに、著者は注目する。地獄に堕ちたらそれまでではなく、

髪は浮き草 身は沈み草 流れ川にて身を許すが ごぜんの舟に竿さすならば  
主ある者もない者も ごぜんの舟から 乗りおとすな 乗りはずすな  
この船に 請じ参らせさぶろうぞや 請じ参らせさぶろうぞや (188頁)

という暗示は、封建的的女性観のもとで苦しんだ女性たちはもとより、現代においてもイタコを頼って訪れる全ての人にとって救われる思いがするのではないか。

笠井キヨ巫女の経文は、舟の漕ぎ手や舟に請じてくれる存在については、明確に誰であるとも、絶対的な権威として示すわけでもない。「さりながら、実体験としての超自然との接触、交流は真実味を帯びて」(181頁)いて、「難しい思想を経ずとも、「救われる」と述べるイタコの言葉はありがたい」(18頁)のである。そこでは依頼者の主体性、つまりイタコをどう信じ、何を求めて降霊を依頼するのか、が焦点となっていく。

著者は「死に口(死んだ人の霊との交流)」に臨んだ依頼者の事例をいくつか挙げ、「良い依頼者は語られた言葉に秘められた真実を、自分が渴望していた答えを聞き取る。意識の深淵に沈んでいた事柄を、死者の言葉で浮き上がらせ得る。それは埋もれて気づかなかった心の宝石なのだ」(29頁)という。一方的に託宣を受けるのではなく、依頼者が能動的主体的に聴き取ろうとするベクトルも働いていること、イタコと依頼者との双方向の関係性を強調する。イタコの側については「よく当たるイタコ、上手なイタコだと言われる者は、多くの経験をふまえて、直感的に依頼者の反応を読めるのである。芸術家と同じであり、拙い者もいる」(28-29頁)のであり、「口説き(=呼ばれた死者が思いを語る)」の場面では「呼んだ者と、呼ばれた者が対話しつつ、間に答え、その答えに反応し、現実のように両者が語り合う」(23頁)。そこに、依頼者の需要の核心が存在する。

イタコと依頼者との私的で個別の関係性が、一方で地域の文化として共有されていくこ

とについて、第十章では「巫業はイタコと依頼者との直接対面の関係を基本とする。それ以上の結びつきは無く、集団形成の結束力はない。しかし、そのことがらが、人々に共有されているのである。信じていることを容認する人々、その巫業を認め、了解する人々がいる」(157頁)、「イタコの習俗は、津軽地方で個人が要請する宗教的行動パターンであり、その社会成員の多くが承認し、権威を感じ、慣れ親しんできたものである」(169頁)と述べる。そして「イタコの巫業によって、民間の人々が要請していた事柄を知る。儀礼が回復され、継続し共有されることによって、過去からの習俗が社会的に記憶され伝達されて、私たちの文化となる」(169-170頁)と結ぶ。

ここで著者がいう「私たちの文化」とは、単に、著者が津軽に生まれ津軽を拠点とし、津軽のイタコに長く寄り添いつつその習俗を探究されてきたことを踏まえての「私たち」のことだけではないだろうと思う。

イタコを必要とする心情とは、病で、事故で、あるいは天寿を全うしてさえ、家族や友人やパートナーなどの愛する存在を死によって隔たれた体験のある人すべて、そしてもう一度亡くなった人の思いを聞き、こちらの気持ちも伝えたいという願いを抱いたことのある人すべてに通じる、普遍的な心情なのではないか。目に見えぬ存在、記憶に生きる死者の言葉を得たいという願いは、時代を超えて今もなお存在している。その意味で、イタコの巫業とその習俗は、津軽という一地方の事象にとどまらない、人としての私たちの文化の一部であるともいえよう。

上述のようにイタコの巫業は、依頼者と個別に直接対面し、対話することによって成立してきた。あの世の懐かしい人と繋がるには、依頼者も巫業の場にいなくてはならない。その場でイタコの発する声や音を通さなければ、真に欲する慰めは得られないのだ。

この評文を書いている2021～22年現在、世界を席卷している感染症ウイルスの勢いは未だ衰えず、深刻である。人との直接の対面や対話は感染予防のために制限され、リモートで即座に繋がるテクノロジーの利用がいっそう標準化しつつある。一方で、対面・対話でなければ成立しない、満たしえない、癒えないものがあることを、このパンデミックの2年間あまりでさまざまに評者は実感してきた。そのような中で本書に接し、イタコがその巫業を通じて果たしてきた地域社会のカウンセラー的な役割について、切実に、真摯に、謙虚に、改めて考えてみるべき機会を得たように思うのである。

私たち—評者を含む私たちとなる—は今、イタコに何を求めようとするだろうか。伝えられてきたイタコの習俗に対して、これから何ができるのだろうか。

さて、本書の大きな特徴として、イタコの巫業の中心となる声と音、語り（節をつけての語りであり、広義の音楽的行為である）の音楽的側面について分析・考察している点を挙げたい（第九章 音・音楽）。著者の笹森氏は、作曲家であり民族音楽学を修めた学者・教育者である。イタコの巫業における音・音楽的側面への着目は当初から大きく比重を占めていた（前掲書1986）。

経文のテキストは言葉として依頼者の耳に届くが、依頼者の心情に響くのはそれらの意味内容だけではない。信頼するイタコの声を通じて意味内容は顕現する。旋律の枠組みの中にそのつど言葉を自在に乗せていく技術、音具・楽器の音と共に響く空間、依頼者との緊密な距離で耳にできる幽けき音、口寄せの場全体の雰囲気、それらがトータルにイタコの巫業を作っている。

「イタコは盲目であるので、コミュニケーションの手段が音である。音具と概念を伝達する声である。声にしても、言語概念だけでなく、音色、強弱、テンポ、リズムなどが重要な意味を持つ」(143 頁)として、口寄せを始めるときの祭文の旋律の音組織を音楽学的手法により分析し、「イタコの誦詠はアンヘミトニック・ペンタトニックが主流であり、洋楽の調である長調・短調のトナリティや全音階(ドレミ…)は用いられない」(148-150 頁)と報告する。アンヘミトニック・ペンタトニックとは半音を含まない五音音階のことであり、日本の民俗音楽に広く見出せる伝統的な音組織の一つでもある。

著者は、「精神状態がいかに憑依していても、また即興であれ、その基本様式を逸脱しないのは、イタコたちの音感の底流に、洋楽に影響される以前の日本音楽の伝統が強く流れていることを示している」(150 頁)と結論する。このことは、笠井キヨ巫女による「人は死ぬと、自分を呼び出す霊能者の言葉で話せる能力を持つのだ」(26 頁)という説明にも繋がると思われる。媒介となる霊能者の身体に備わった言語と文化的背景がその巫業と不可分であることは、本学会誌の読者にとってはすでに自明のことかもしれないが、音感覚についても同様のことがいえるというこの指摘は、なお非常に重要である。

本書が対象とする津軽のイタコのみならず、他の民族や文化での(広義の)シャーマニズムにおいて表出される託宣や語りは、多かれ少なかれ、通常の会話とは異なるという点での音楽的な行為を伴っている。本書は、民俗学に関心のある読者はもとより、民族音楽学ないし音楽民族学にとっても興味深い話題を提示してくれている。

「調査体験に基づき、客観的・即物的な記述とすべく努力した」(4 頁)との序言のとおり、本書には全体に淡々と冷静な文体が通底している。しかし、その行間からは著者が長年接してきたイタコの諸氏や、イタコを通じた靈魂との対話を求める人びとに対する温かな気持ちが伝わってくる。そして、抑制の堰を切ったように「結語」の後半、「口寄せ」のトポロジーについての展開部(181-182 頁)では、何度も読み返したくなるような味わい深い文章が展開する。それが却って、イタコとイタコの習俗を育んだ津軽の文化に対する多層的な理解のサポートを、読者に与えているように評者には思える。

結びの「口寄せで詠唱された〈後世の舟〉は全ての人に用意されている」(183 頁)という一文に、評者は不覚にも目が潤んだ。一般向けに書かれたとはいえ学術書を読んで泣けたのは初めてである。評者もまた無意識裡にイタコを求め、「渴望していた答え」(29 頁)を聴き取ったのかもしれない。

#### 参考文献

文化庁文化財保護部(編)

1986『民俗資料選集 巫女の習俗Ⅱ』財団法人国土地理協会、東京都。

(こうち・りえ／北海道博物館アイヌ民族文化研究センター)